

三河アララギ

平成二十四年

八月号

第五十九巻 第八号



ニューヨーク日記(70) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

March 9, 2012 : Hospoda – Czech cuisine

Blue Shoe Diaries



チェコ料理のレストラン行ってきました!マンハッタンにあるんだけどあまり何も無いエリア。チェコ領事館のビルの中にあるの。レストランに着くと何かヨーロッパに居る気分。料理も美味しかったけど中にはディナーよりランチに食べたいような卵のサンドイッチみたいな物も出て来た。今晚のハイライトはこの揚げた卵のアペタイザー! トロトロの卵が美味しそうでしょ?

Czech dinner at Hospoda tonight! In Manhattan but a little out of the way in midtown on the east side. A bit of no mans land, in the building housing the Czech consulate. It's a space where you feel like you're somewhere in Europe. Casual and comfy with pretty good food. Some of it felt more like a lunch or brunch menu but there were highlights, like this free range fried egg. See the egg oozing out? mmmm~

目次

第五十九卷第八号(通卷七〇四号)

表紙 城ヶ島	今泉 由利 (1)	世界平和	阿部 淑子 (27)
ニューヨーク日記(70)	Blue Shoe (2)	浄土浜	富岡 和子 (27)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」	(4)	黄金に	白井 信昭 (28)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	現代学生百人一首	(28)
藍淡き空	岡本八千代 (6)	「ことよせ」	いーはとぶ (29)
天国への	今泉 由利 (7)	私の一首	岡本八千代 (30)
八重子さんを偲ぶ	弓谷 久子 (8)		小野可南子 (30)
かけがへのなき	青木 玉枝 (9)		金津 文枝 (31)
実花	内藤 志げ (10)		清澤 範子 (31)
「隅田の花火」	佐藤 喜仙 (11)	俳句	植村 公女 (32)
笹百合の花	林 伊佐子 (12)		一石 (32)
田蛙の	安藤 和代 (13)		喜仙 (33)
友の悲劇	伊藤 忠男 (14)		皓一 (33)
山梔	胃甲 節子 (15)		佐藤 喜仙 (35)
白鷺	金津 文枝 (16)	贈呈誌 六月号・七月号	大橋 望彦 (36)
スベリヒユ	半田うめ子 (17)	子規の短歌革新とアララギの歌人(1)	今泉 雅勝 (38)
栃の木	清澤 範子 (18)	ある自然科学者の手記(3)	一石 (40)
どんよりと	近藤 映子 (19)	絹の話(21)	鮫島 満 (42)
母と共に	伊与田広子 (20)	物理学者と詩歌の世界(31)	夏目 勝弘 (44)
立山の	杉浦恵美子 (21)	短歌に詠まれた茂吉	岡本八千代 (45)
鈴花	堀川 勝子 (22)	再びむすびの地へ	今泉 由利 (46)
「えにし」	平松 裕子 (23)	「水魚」のことから(139)	平松 温子 (48)
菩提樹	小野可南子 (24)	ことのはスケッチ(404)	
茅の輪	山口千恵子 (25)	和菓子街道(70)	
再びむすびの地	夏目 勝弘 (26)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

朝くらき雨の中にてぬれわたる瓦の屋根を鳩は歩めり

P
202

高き窓むらさき淡く夕映えて患者は海のにほへる女

P
204

歌集 「一本の木」

杉 浦 弘

花水木輝くかどを曲る時アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク

暮れぐれの雨の路面に散りたまるニセアカシヤの白き幾所

曲り来て背中すりぬけゆく時にミソサザイうつ舌うち二つ

藍淡き空

蒲郡 岡本八千代

梅雨の間の藍淡あはき空へ消えたまふ三河アラギの君と君はも

君と君亡き人の数に入りたまふ庭のあぢさゐま白に白し

「雨の日は傘さして来よ」の短冊を人に見せむとけふは持ちゆく

向かひあひて朝餉してをり北の窓久しぶりなる青空みえつつ

青空の見ゆればやはり楽しかり勇ましき心湧くごとくして

われに來し小さき蚊一つつぶしたりこれよりこもりてもの書かむとす

夏至すぎて巡り來し月は十日月あまりに速しわれに過ぐる日

卷子さんのあぢさゐ白く咲き初めて淡々と常の日々すぎてゆく

もらひたる山法師の花かこみつつ先づはわが言ふその花の名を

不甲斐なきを語れば少し逆らひて祖母の吾との短夜更みじかよけつつ

天国への

東京 今泉 由利

ズームせしごとく岩山迫りくる妙義山のトンネルに入る

トンネルを幾つ越えしかトンネルにまた入りゆきまた入りゆく

目を凝らし目に見えゐるは暗黒の濃淡なくしてひたすらの闇

地球にてひたすら暗い闇のなか雲は消したりすべてのかかり

60兆の0.1%の相違にて人間としてあなたと私と

未知といふことの待ちをり次の駅未知解決はもうすぐですよ

見聞は自の言葉に変換し守りかゆかむひとりのひとを

アカバナの夕化粧の花咲きそむる帰りゆく家まだまだ遠い

137億光年のその先に何も無い訳ではないと知り

天国への距離と言はるる¹⁹遠い近いの私の基準

八重子さんを偲ぶ

豊川 弓 谷 久 子

初めての歌会の席に近く住む君のいまして驚きたりき

八重子さんと呼びて頼りき一つだけ年上の人歌の先輩

君偲ぶすがとならむ戴きし歌集「えにし」も服もバックも

心のうちを聞いて貰ひし日もありきえにしなりけり三十五年

公民館に活け花教へて貰ひたり君凜としてかつ優しくて

茶に花に書道と才の溢れたる君のすべてが羨しかりたり

足弱くなり来し君に手を貸して御津山歌会昨日の如し

夕日の中の弘法大師の君の歌我に残れる水茎のあと

ひっそりと田園の道今日は行く君のいまさぬお屋敷に沿ひ

御津山を真近く仰ぐ散歩道君が日毎に歩まれし道

かけがへのなき

新城 青木玉枝

玄関を一步出ずれば電線に雀がずらり朝の挨拶

山並の向かふはなつかし蒲郡小鳥になりて飛んでゆきたい

故里の八十年はわが生活^{たつき}かけがへのなき人生だった

区画整理私の家だけ壊さるる続く家並は今も建ちをり

雨きざす風にかあらん里の夜の夜もすがら窓をたたく音せり

山裾の道はデコボコと思ひしに何処まで行きてもアスファルト

虹の郷週に一度の声の中今では馴れて嬉しき集ひ

ポストまで三百五十歩往き帰り誰にも会はぬ里山の道

伊丹を出でこの山里に五ヶ月をきびしき寒さもやうやく終る

目薬の残りの一滴さし終へて今夜も独り眠りにつこう

常滑^{とこなめ}の鶯色の急須にて新茶たのしむ今日のはじまり

実花

豊川 内藤 志げ

いと細き実花に朝々交配し確かな縞目の子玉が一つ
学校を出づる時間か雷と篠つく雨とが窓ガラス打つ
西光寺の銀杏を拾ひて老人会を起し下されし近藤様は
青刈りの藁を持ち来し年毎に、縄作りを教へ下さりき
娘よりおすそ分けよと向日葵を重たく受ける黄のいっしょく一色
草の中熟れし梅の実香りたつ梅雨の夕暮れ屋敷の畑に
点滴の雫を見つつあと幾日玉蜀黍の出荷となるか
曇後雨となる日の夏椿風邪に籠りて廊下の窓を
銚花を危ふく揺らす台風はわが地に向う速度を早め
裏の窓細く開きて雨の様まだまだ降りぬ白雨となりて

「隅田の花火」

豊川 佐藤 喜仙

湖岸の庵その白壁にはねきたる日の斑ちらちらまぶしかりけり

夏の夜の一番の音に導かれシテ蕭条と佐渡の能舞台

蒼穹の山の中腹風涼しブルーポピーの群れし花園

青梅雨の郡上の川は匂ひ立つ釣師は長竿水中で振れり

大洋の波と闘ひ入港のヨットの索具カラカラ鳴れる

万緑の中を黙々登り行き頂上は視界開け風抜くる

白樺の風の匂へる山の湖ハンモックつり午睡むさぼる

夏の雨降りみ降らずみ百花園隅田の水も滔々と流る

夏萩のしだるる脇よりスカイツリー見あぐればその先端雲の中

額あぢさゐその名隅田の花火とふゆかしき花にひかれ佇む

笹百合の花

岡崎 林伊左子

梅雨ぐもる夕べの道を点すごとみなかたむきて笹百合が咲く

わが山に咲きたる笹百合とりて来て活けたる居間に芳香ただよふ
片目づつ開きては閉づ新緑のまばゆき山に視力たしかむ

人気なき山里にして道のべに螢袋は朝の花吊る

農に生きるわれの奢りとひもすがら四季の蔬菜を飽くなく食べぬ

朝採りしキャベツ刻みてさくさくと噛みしめて食ふ老いの生活

農耕の栽培法は無農薬虫は手で取る祖父母しのびぬ

吊し置くCD盤が朝の日にピカピカ光る西瓜畑に

餌をまく程なく雀は集ひくる盗み見てゐるひととき楽し

日の落ちていまだ明るき空の下鴉も森に帰へり行きたり

田蛙の

豊川 安藤 和代

小さくとも今日の楽しみ見つけたり心も軽く朝の米研ぐ

共に見き母逝きてより四十年今日ひとり来て藤波に立つ

肥えづきた青田を渡る風清し犬との散歩遠回りする

田蛙の声聞く夜は宿舎にいる孫を思ひて眠れずにをり

炭を足し家族の手をば温めたる火鉢に今日は睡蓮の咲く

長生きはするもんじやないと泣いていた友はひ孫の出来てルンルン

若いと言うただそれだけで素晴らしい若者集うを眩しく見つむ

クラス会に出掛ける夫は時かけて鼻歌まじりで髭をすりをり

派手めなるブラウスに合うピアスして今日は私のランチに行く日

緑濃くどっしりと見ゆる石巻山歌に詠めとぞ鳥一羽舞ふ

友の悲劇

大阪 伊藤忠男

頸椎を損傷せしと友の報何がどうなり何をどうする

突然に手足動かぬその悲劇なんで段差がそこに有りしか

足上げて跨ぐつもりもどこかしきつまずく段差に腹立てる歳

気丈夫な奥さま救いてきばきと手を取り介護見るも健気に

支えるは私と笑う奥さまの心いかに計り知れぬや

友は今苦(にが)み辛(から)みも味わえぬ食事は管をとおり身体に

リハビリを耐えて乗り切れ叫びたくなれど声出ず友の涙に

この悲劇明日は我が身ぞ誰や知る我がその身と誰も思わず

雨蛙鳴く声耳に夢うつつ哀し雨音まだ続く朝

ただ青く静まり返る青空も雲が動きて刻む時知る

山 梔

豊橋 胃 甲 節 子

眼の老化進みて庭の木の葉さへいろんな像に見へ来る不思議

菖蒲咲く水無月なれどもう十年菖蒲見る事無く過ぎ来たり

籠持ちて野苺摘みに行きしこと子供の頃の思はるる朝

黄昏る庭に山梔ふふらみて明日咲きますと微笑みて見る

山梔の一輪活ける玄関にてダスキンレデイは匂ひ喜ぶ

台風に揉まれ揉まれし桜の葉みな裏返る今朝の静けさ

台風は予想より速く通り過ぎ今宵も普通の眠りのなかへ

ハゼの実は艶つやたつぷり濃きみどり花無き庭の吾のなぐさみ

少しばかり定家葛の花見へて小さき喜び胸にあふれぬ

頼り無き弱き歩みに帰り遅き吾に苛立ち大声の夫

白鷺

島根 金津 文枝

犬を作る鼻と眼をつけ耳もつけ可愛くなるガラスのプローズ

材料はガラスプローズ薄い物から厚い物を重ねて作る

朝霧の立ち込めぬる祖父谷を見つつ越えゆく松江市までを

新緑の深き山並を眺めつつ幾曲して松江市へ墓参と買物

由利先生のことのはスケッチを読み富士山の五合目迄行きし思出

富士五湖の一つモーターボートに乗り水の美しさお土産を買った思出

調布に住む長男人生一度は必ず富士山に登れと言いくれし

書店経営販売三人の子を大学に行かせこの如くの本屋で今求め買ふ

使は無い色眼鏡に墨を塗り金環日食ひたすらに見る

白鷺の巣立ち宮森を往来する幼鳥も飛びゆく親鳥に従い

スベリヒユ

新城 半田うめ子

藤の花房たれ下りつつ道の辺の昨年咲きしを思ひ出すなり

小さくして美しくあり眺めつつ庭中に咲くなでしこの花

今日も又からすの数羽さわがしき深き緑の杉林の中

西川の川辺を歩くスベリヒユさがしつつをり吾の好みの草

草々も好み食むなり消毒の激しき野菜好まずなりぬ

急行の列車に引かれしことありき助けられつつ吾生命あり

神社にて森の中より白鷺の舞ひて来るなり美しきなり

西川の上を舞ひ居りおしんどり二羽むつまじく小さき鳥よ

枿の木

春日井 清澤 範子

枿の木の落葉踏みしめ八王子神社境内を吹く初夏の風

詣でゐて小鳥のさゑずり聞きをれば吾が重き心癒えくる

掃き清められたる神社の賽銭箱のその上にまた落葉たまれり

神社に詣で舞台に座れば木立より小鳥さへずり吾が心癒ゆ

行く道にもろ草の中にゆれゐるは野菊の黄色わたしの心

長く長く思案してをり腰かがめ庭の草取り今日出来ました

片手つき又片膝つきて草を取る夫も吾も腰氣をつけて

剪定したる椿の若葉緑濃く縮れたる葉を覆へる程に

縮れたる椿の葉先は新緑に映えて吾が庭に初夏の風

狭窄症の手術をしたる夫に添ひ台風の後始末吾も手伝ふ

どんよりと

名古屋 近藤 映子

どんよりと重く曇りぬ皐月末突然光る後の雷鳴

風邪引きて夫の顔見ぬ三日程横臥しつれど気に成る終日

娘より夫の様子を聞きたれど何故か不安に責めらるる

水無月八日つゆ入りと気象庁のニュースを聞きつつ

どんよりと灰色雲に気の重し亀の水替え一時うるおふ

水無月中葉も過ぎて行くどんより曇る今日の日も又

わが夫を見舞ひて左手をわれは握りてそつと話せり

六月の中葉を過ぎて曇り日の多いと夫の耳元に話す

一枝のダチュラは鉢に根付きたり一つの蕾しかとつけをり

水無月の台風四号雨風強し毎時のニュース聞きつつ空見ぬ

母と共に

豊橋 伊与田 広子

われも一度登って見たきと思ひつつテレビに見入りぬスカイツリー

母と共名古屋テレビ塔に登りし時これで見納め母の言ひしを

スカイツリー六百三十四米何処まで見ゆるかわれの目に

四ッ葉会これが最後の同級会^{やそじ}八十路になりたり豊橋高女

毎年^{マイトシ}に小学校の同級会開きをりしに八十路^{やそ}にて止む

はるばるとアメリカより来たる友最後となれる同級会と

四ッ葉会主になり世話されたる田尾さんへ花束贈るお元気にと

老いたれば山へ行く人少なきに自身も意欲なくなりしかと

四ッ葉会駅より市電に乗りたりて赤岩口まで往復なり

節電か薄暗き中無燈火の車走りて危険なりけり

立山の

蒲郡 杉浦恵美子

亡き後の日数数へて何になる記憶の中の夫は変らぬ

ふたり暮しひとりになりて半分にあらず凡てを失ひし心地

共に居し時には気付かぬ些細なる夫の仕草が不意に浮べり

手つないでミラノのドウオモ横通り過ぐ四半世紀前不意に蘇る

立山のみくりがいけに我が居る雄山に眠りし夫を訪ねて

なんといふ神々しさよ立山の初夏に切り立つ雪の壁面

立山の夕陽の影は淋しかり夫が居ぬのが殊更身に沁しみむ

浴槽の向ふは雪の急斜面ターンする夫の幻浮かぶ

夫居らば頭が痛いと言へるのに周りはそこまで言へない人々

辛いことばかりでなかった筈なりき太く短き夫の生涯

鈴 花

豊川 堀川 勝子

節生りの胡瓜の幼果数の見ゆ明日に繋がるいのちは楽し

仕方なく畑に植ゑにし沙羅の木に白美しく朝咲き居り

畑には無用の影なす沙羅の木に白麗しし吾のみの花

迂闊にも鋤にて崩しし巢穴より溢るるごとくアリの出で来る

巢穴より出で来しアリは散りぢりに吾が足襲ふ数匹のアリ

巢穴より溢れしアリは散りぢりに刃かざしつ吾が足襲ふ

丈高く葉づれの緑なびき合ふほどよき雨の晴れたる朝

台風に倒れし唐黍ゆり起こす真一文字に口角上げて

鈴花は僅か一日の寿命とて倒れし雄花に交配は無理

丈高く列なす青き唐黍に賭けいし期待は空しき夢か

「えにし」

豊川 平松 裕子

「子とともに」の冊誌に載りぬし君が歌幼心に憧れてゐき

長生きを喜ぶ短かき一文を三河アラギに残して逝きぬ

上がれ上がれと言はれて上がり暗くなるまで話し尽きざりし日の懐しき

孫律を見に来て下さりし日も遙か思ひは尽きぬ読経の最中も

大き大きくちなしの花は未だ蒼下さりし人は今は亡き人

秋海棠令法の木もいつしかに絶えてゐたりぬ我が裏庭に

「えにし」とふ歌集残して逝きし人えにしの重さ深さ知り尽くし

やさしさは人一倍なり精神の細さもさらに人の数倍

我が店より買ひ下されし沈金の手焙りを玉の如くまで給ふ

大切なものを大切と思ふ心伝はりてをりやさしさとともに

菩提樹

豊川 小野可南子

翻り垂直に昇るつばくらめ今し遮断機降りはじめたり

一輪車に積みあげし蕪の緑葉よりあはれヨロヨロと紋白蝶の発つ

奥三河の湯宿めぐらす樹立より細ぼそ聞こゆ鶯の声

訃報は唐突にして八重子様絶筆は三河アララギへの「私の一首」

文中に「長生きをして良かったな」文字たをやかに美しくあり

「長生きをして良かったな」この原稿こそはご家族のもとへ

ふくよかに笑みこぼしつつそのお顔旅立ちたまふ八重子様はや

お心にふるるこまごまやさしさを短歌に寄せたまふ榊原恵美子様

八重葎を知らないといふ私に三筋四筋の細きみどりを

さるさると揺れ撓ひるつ菩提樹の枝に房なす粒らさみどり

茅の輪

豊川 山口千恵子

田植ゑ終へ今朝は心安らげり花びら白々ユキノシタの花

庭石の陰に繁れるユキノシタ花びら白しろかすかに揺るる

爆弾に死せる少年なりし兄のこと語りし姉もまた今は亡し

流し台にうろうろ蠢く蟻いくつつぶして朝の仕度始むる

久しかりし雨の降りたり軒下に植ゑしゴーヤの蔓のゆらゆら

触角のごとくゆらゆらの卷鬚は隣の支柱に今朝とりつきぬ

掲げある説明よみつつ鳥居前の青き茅の輪跨ぎてくぐる

光る糸はりし池を覗きたり緋鯉泳げり真鯉泳げり

黒土より馬鈴薯ころころ黄の色明日は雨らし掘りてしまはむ

出来の良き今年の薯はキタアカリコンテナ二杯のわれのジャガイモ

再びむすびの地

豊川 夏目勝弘

五ヶ月余の旅を終へきて蘇生人に遇へしごと迎へられにき
くんくんと鼻を鳴らす癖を持つ芭蕉の姿を想像する

蕉翁の齡よわいをはるかに越えにけりただそのみの平凡な日日

齡のみ倍を生きなば蕉翁を越えしと我は誇りて言はむ

トウカエデの青実つけゐる歩道には昨年こぞの枯れし実あまた落ちをり

トウカエデの枯れし実落つる歩道ゆく木の実拾ひし芭蕉の句うかぶ

台風の名残りの濁りか水門川の水草のどかにゆらぎてをりぬ

並木樹の根にて歩道の波うてり葉桜の下梅雨冷えの風

五ヶ月余の千里の旅を3DのAVにて忽ち巡る

伊勢の地に船出をせしは秋晴れのおだしき海ぞ思ひ浮かべり

世界平和

横浜 阿部 淑子

テレビより聞こゆる言葉語源にと取り出す辞書の重さ苦にせず
七夕の星に願うは数あれど世界平和はベストワンなり
セミナーに出かける場所の遠くして尋ねたずねて皆のやさしさ
杖つきて電車に乗りてゆずられて身にしみている席のぬくもり
登山電車あえぎのぼれるそれよりも駅伝選手は倍のスピード

浄土浜

東京 富岡 和子

アルバイトを終えて夫の帰るころガラス拭き終うママレードづくり
芥子坊主少し残りて土おこす早や半年の過ぎゆきしこと
学内をシャボン玉してかけまわる幼な子らに幸多かれと
岩手山を水面に写し夕茜被災地宮古友と訪ねし
うみねこと真白い石の浄土浜レストハウスはいまだ開かず

黄金に

豊川 白井 信昭

村なかのくねくね道を諦めて白川添ひの農道を行く

つんつんと黄金になびく麦畑かぐわしき香の漂ひてくる

現代学生百人一首 東洋大学編纂

端末やネットで繋がる現代人孤独^{ひとり}と見るか仲間と見るか

埼玉県立春日部高等学校二年

小林 俊晶

冬の日に共に歩いた雪の道歩幅合わす君はもういない

千葉県芝浦工业大学柏中学校三年

雨宮 佑弥

ゆずの葉にしがみついているいもむしをどうか風さん飛ばさないでね

千葉県成田高等学校附属中学校一年 重吉 彩乃

朝起きてトマトにキューリナスゴーヤ朝市思う祖父の縁側

千葉県麗澤中学校一年

勝見 聡太

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

花終へて庭に移せしシクラメン一年ぶりに紅き蕾が

石田 文子

薄紅の母が残せし小袋よ中の新札しばらく借りおく

山崎 俊子

うすれゆく夕光かげの中に棟の花その紫の淡くなりつつ

三田 美奈子

わが隣空き家になりて幾年か鴉つがひの番が今年も巣づくり

稲吉 友江

いつしかに純色の海にフィリップ島沖より現るリトルペンギンら

鈴木 美耶子

おごそかに猷華行はる延暦寺僧の誦經ずの高らかなる声

吉見 幸子

下賀茂の鳥居に大きしめ標の縄勅祭の神事始まらんとす

牧原 正枝

東京の友からの文ふみしばらくはながめてゐたし毛筆やさし

岩瀬 信子

私の一首

常のわれの湯呑にそそぐ熱々の白湯よりのぼるしろじろの湯気

岡本八千代

春とはいえ、まだ寒い夜であった。ひとり本を読んでいて、夜半となっていました。温かい白湯でも呑んで寝ようと思った。いつもの鉄瓶で沸かした熱い白湯を、いつもの自分の湯呑みに注いで、両手で包み持った。静かな空間に私ひとりの心。湯呑よりほのぼのと白い湯気…。その湯気を美しいなあーと思った。でも、「しろじろ」の表現は少しおおげさな気がする。

——日常生活の何でもないことを歌にしたかった。

幼気いたいけな子象のマーラのその姿見たしと杖をつきつつ来たり

小野可南子

豊橋動物園のアジア象に赤ちゃんが生まれました。その子の名前はマーラ、産まれた時から母象は、この子を認めようとはしませんでした。飼育員さんの手で大切に育てられ、すくすくと成長し私が会いに行った日は二月の半ば、もう二〇〇kgを超えていました。幼い象の目はやや吊り目で白目が赤いのです。ほんとうに愛らしく「赤ちゃん」私も母親目線でマーラの動きを見守ってきました。ずっとずっと元気に成長してほしい!!

内湯から硝子戸越しに見ゆる雪温泉ゆつくり体を沈む

金津 文枝

足立美術館に温泉が湧き私の家より車で十分、飯梨川を半分に分け山側と町側老人ホーム等幾ヶ所もあり、料金参百円
温度も上々冬は殊に温まり温泉の中は広く硝子一枚開けると外は雪景色、温泉の好きな私ゆつくりと甘えて昔の友達に偶然出会いい心地良い温泉です。三男の誘いに喜んでいきます。

雨水の日かすかに光るこもれびに春の温もり感じてゐたり

清澤 範子

二十四節気の一つ雨水、氷雪がとけて雨水となる日、今年は二月十九日でした。今年の春は三寒四温が激しくて、寒い日は廊下より庭を眺め、剪定した椿や貝塚の繁る中、ひと際緑く差す柔らかき陽差しに少し春の温もりを感じました。近くの堤防の桜は開花して十五日程花見を楽しみました。お花見をしたお弁当の上に、五弁のままの花が舞ひ落ちて思わず口に入れてしまいました。天候が変り易く体調に気をつけ頑張りたいと思います。

「俳句」

新しき地蔵の帽子青蜥蜴

植村公女

弁護士の茶髪の乱古扇

野良猫のひっそり隅に新樹風

重力は時空の歪み青林檎

一石

いつの世も生き物耐えて野分き来る

水満ちる季節にありて書に浸る

額あぢさゐ隅田の花火とふ名花かな

喜仙

薫風や牧に草食む親子牛

老鶯ををちこちに聞く山の畑

手のひらに乗せてしばらく雨蛙

皓一

雨上り合歓の花よりひと雫

荒れ庭のどくだみの花白白と

贈呈誌 六月号・七月号

「秋田アララギ」

東海林 諦 顕

一人ひとりの真の思ひを大切に暮さは絆はいらぬといふこと

「秋楡」

西 尾 清 子

早朝の川辺にたてば小舟ゆく川面に映る花分けながら

「愛媛アララギ」 六月号

川 本 正 子

独り言とも聞えて声の細くなりし老いたる夫を見守るのみか

七月号

清 水 正 男

日々ゆきて日々逢ふ吉敷の朝の道往くも帰るも愁は深し

「鹿児島アララギ」

山 本 和 男

桜花散りはじめしと伝へ聞きただよふ如き風邪の眠りに

「高知アララギ」

小 松 もとみ

葦むらの穂は細りきて川広く吹きくる風のいまだ北より

「滋賀アララギ」 六月号

内 林 加奈恵

新しき筆をおろして認めぬ友の終なる「スカーフ」の歌

七月号

安 原 律 子

朝掘りの竹の子三本届くなり柔らかに茹で飯に汁にと

「冬雷」

六月号

川 又 幸 子

先生の吐息溜め息聞きのがすまじと近く侍りき耳若かりし

七月号

小 林 芳 枝

竿に掛け柵に広げて干してゐる幾何学模様のカーテン四枚

「柊」

勝 木 四 郎

雪吊りの縄はしどろに土につく味真野苑をさぶしみめぐる

「群山」

高 橋 宗 伸

原発の最稼働など是有り得ずと一途に思ふ吾が老いなりに

「榎の木」

塚 本 明 夫

竜巻にケヤキ四五本倒されぬ土浅くして根は深からず

「穂の原」

神 谷 叔 子

日々通る坂道の辺にひと本の桐の花咲く孤高のごとく

「かさね」

松 本 周 二

菜の花やサナトリウムは対岸に

岩の上の亀動ぜずやうらけし

子規の短歌革新とアララギの歌人(1)

佐藤 喜仙

(一) 上京迄

「隅田川堤の櫻さくころよ花のにしきをきて帰るらん」(明治十五年作る竹乃里歌入集作) 明治十五年春といえは子規十四歳、松山中学在学中であつたが、上京を熱望していたのである。

正岡子規は慶應三年(一八六七年)陰曆九月十七日(陽曆十月十四日)伊予国温泉郡藤原新町(現・愛媛県松山市)に、松山藩下級武士であつた父正岡隼太常尚、母八重の次男として産まれた。

「春や昔十五万石の城下かな」

後に子規が詠んだ城下町である。しかし松山藩は幕府の親藩だつた為、勤皇派中心の明治政府の風当りは強かつたのである。

父常尚には先妻(病没)との間に長男があつたが夭逝している。

母八重は、松山藩の藩校「明教館」教授で漢学者・儒学者であつた大原観山の長女で三十三歳の時常尚の後妻となり、子規を生み、三年後に妹・律を生んだ。

ところが父常尚は明治五年(一八七二年)子規が五歳の時、

過度の飲酒がたり四十歳で死去。その為八重は実家の後見のもと、裁縫などの内職で生活を支えた。妹律によると、母八重は「何事にも驚かない、泰然自若とした女性」だつたそうである。その事は次のエピソードにでも伺い知ることができる。

「子規が三歳の頃火事にあい嫁入道具いっさいが焼け失せたときも残念そうな顔ひとつ見せず、人々の語り草になつたという」この強い性格が、早く夫を失い、しかも晩年は不縁となつて戻つて来た律とともに寝たきりの子規の看病に専念する生活を支えたのであろう。

この強い性格は子規、律に受けつがれたのである。子規が死病をかかえながら、俳句、短歌の革新をなしとげ、律は子規がいくら泣き叫ぼうが、平然とカリエスによつてできた背中の穴から膿を取り除き、包帯を取り替える看病を続けることが出来たのである。

この強い性格は多分母八重の父、子規・律の祖父大原観山から受け継がれたのではない。観山は江戸にのぼつて昌平黌で学んだのち松山藩の藩校「明教館」の教授となつた人だが、学識人格ともにすぐれた人物であつた。

幕末に「明教館」に学んだ内藤鳴雪は「鳴雪自叙伝」で述懐している。「先輩は勿論、先生達さへ別に恐いと思わなかつたが、この人(観山)だけは恐れてゐた」

ある自然科学者の手記 (3) 大橋 望彦

「DNA鑑定雑感」③

異常の如く、DNA構造は複雑であるが、構造維持のためというか、遺伝情報の維持に二重、三重のプロテクターが存在することが判る。それだけに、もしこの構造が緩んだりすると、安全性が劣化することも容易に理解できる。そこで、

DNAの構造が変化しやすい状態は、どんな時であろうか。

体細胞が分裂増殖するとき是一般に無性生殖に依るが、生ずる娘細胞じょうようは遺伝学的に親の細胞と全く同一の細胞となる。然しながら、有性生殖で子孫を作るときは極めて異なる方式で分裂増殖が行なわれる。親の生殖器の中で、生殖二倍体細胞(2N)は減数分裂を二回繰り返し、一個の二倍体細胞から半数体の生殖細胞が四個生じる。これが精子や卵子となる。この生殖細胞同士が結合して受精卵(1N)となり、一回DNAが複製して相同染色体が出来て二人前の体細胞(2N)となる。

この細胞は卵割を繰り返し(細胞は2、4、8、16、32、…個と順次倍増していく)、桑実期、そして胞胚(胚盤胞)が出来、囊胚となり、中胚葉、内胚葉、外胚葉、が出来てそれは神経系、内臓系、皮膚系のような器官に形成されて、形態形成が進み胎児となり子供が出来る。この過程の中で、特に精子は厳しい条件きんじょうに曝さらされるのである。

即ち、生殖器管の中で減数分裂により出来たスパマチド(精母細胞)は殆ど裸に近いDNAの状態となり精子スパームとなる。そしてこの精子は非常に危険な状態に遭遇するのである。

射精される精液中には2億とも4億とも言われる数の精子が存在し、放出された女子膣内から子宮頸管を通じて子宮内に侵入する。ここまでは大部分の精子は脱落してしまう。更に奥の子宮管で卵子と結合できた精子は一個に過ぎない。そこまでに到達できた数十個の精子は最初の一個の精子に競争で負けて卵子には侵入できず、死に至るのである。

受精卵として侵入に成功した精子はなんと二億分の一の競争に勝った活力を持つエリートである。過酷な条件に打ち

勝った活力を持つエリートである。過酷な条件に打ち勝った精子であるとは言っても、そのDNAは可成りのダメージを受けたことは想像できる。従って、男親由来のDNAといっても、必ずしも全く同一のDNAが卵子に入ったといえる保証は何も無い。ましてや、卵子に到達できなかった精子(二億近い数の)は、もともとダメージを多くもっていたか、過酷な条件で受けたダメージのために犠牲となったものといえよう。このように考えると、DNAが安定である方が不思議なくらいである。

そうは言っても、まだまだDNAの安定性に関しては別の保護機構がいくつも存在する。その一つに、先にも触れたようにDNAは二重螺旋構造となっている。これは、ペアになっている塩基対(四種類ある塩基に一定の決まった塩基が対応していることを塩基対という、例えばアデニンに対してはチミンであり、シトシンに対してはグアニンである。二重螺旋構造はこの塩基対の連続となっている。)のどちらかが損傷しても、元の相手の塩基が存在しているので修復する手掛

かりがあるので復元は容易である。塩基対の両方の塩基が同時に損傷することは、放射線による損傷の時を例外として、極めて少ない。但し、精子や卵子はDNAが一本鎖となっているので復元の手掛かりが無く、非常に危険な状態にあるといえる。今述べた損傷の修復は、DNAポリメラーゼ(前述の合成酵素)の仲間の修復酵素がその動きをしている。それ故、突然変異というのは、そんなに多く存在するものではないことは理解できよう。そして例え、あったとしても、それが生命現象に影響を及ぼすような状態には、簡単にはならないのが普通である。只、それが永い年月の間に積もり積もって生命現象に何らかの変化を及ぼすことも否定出来ない。

この辺りの機構を考えているのが老化のエラー説であったり、発癌機構(発癌に関与した遺伝子が元々存在し、それが突然変異することにより細胞が癌化する)を考える根拠となっているのである。(つづく)

(訂正とお詫 7月号 37頁4行目 3×4×10¹⁰は3×4×10⁴の誤りです)

絹の話 (21)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

猿と天蚕

天蚕は日本のクヌギやブナ、ナラ林に棲息するヤマユガ科の十数センチにもなる緑色の大型のいも虫で、7月の下旬から9月上旬にかけて細い枝にぶら下がり葉に覆われる様に家蚕（白い繭）の2倍程にもなる美しいグリーンの繭を作ります。繭を作る3〜4日晴天が続くと素晴らしい緑色になるのですが、雨が続きと黄色くなってしまうです。ですから濃淡色々な繭があると云う事です。

本州何処にでも見られ、古くから一般にその繭を山繭と呼び山仕事の帰り等に集められ、その織物は農家の副業として珍重されて来ました。ところが山繭は家畜化された家蚕の様に湯気と一緒に糸口が上がってくる様な楽な製糸が出来ません。人それぞれの名人芸で糸作りをしています。従って昨今では非常に高価な品になっております。

里山を散策していて、天蚕をクヌギやナラ、ブナ林で時々

見かける事が有りますが、体が緑なので見過ごす事が多いです。戦後山林に杉や檜の植林を積極的に進めた為、天蚕の棲息域も大変狭くなってしまいました。

近年山繭の糸は家蚕糸の10倍〜50倍もするので、全国各地で小規模な飼育が行われ、行政が研究開発に力を入れて来ました。自然の状態では収量の予測もつかず、産業になりませんので、里山にクヌギ林を作り外敵に捕食されないようにそれを大きなネットで囲い飼育しています。

幼虫の時期は鳥に食べられやすいのですが、実は天蚕は猿も狸もイノシシも大好物ですので、ネットを地面から頑丈に作らなければなりません。繭を作る直前になると虫の体が次第に透き通ってきます、猿は毎日その状態を山から観察に下りて来て、食べ頃になるまで見るだけでイソイソと帰ってきます。その間猿も各ネットの状態を調べているのでしょう。さあ食べ頃と云う日に穴のあいたネットを見つけ、穴を手で広げ仲間をドンドン招き入れるのです。シルク蛋白でパンパンになった美味しいごちそうを腹いっぱい食べて風のように山消えて行きます。幼い頃、畑で桑の実やヤマモモの実

を木に登って食べた姿にどこか似ています。人類も狩猟時代には虫を多食していた様で、今日でもアフリカやニュウギニア等の狩猟民の人々は腐敗木の中の虫などを好んで食べています。

自分の経験の中でも蜂の子は生でよし、バター炒め、蜂の子飯など、とろけたチーズの様で大変美味しいと思います。東北中国では蛹が好物で、瀋陽の高級飯店で蛹のつまみなど定番のようですが、日本人は奨められて躊躇する人が殆どようです。日本で蛹を好んで食べる地域は長野県くらいになってしまいました。東京で「田布施」と云う蕎麦屋さんでは突出しに蛹の佃煮が出るのは楽しみです。宇都宮では雑多な昆虫を酒のつまみする居酒屋が繁盛していたりします。まだイナゴを食べる習慣は全国的です。

縄文時代以前の食習慣が残っているのは示唆に富む事です。

絹を作る虫は透き通って糸を吐く直前は必須アミノ酸が含まれる高蛋白で血糖値を上げず、体脂肪をコントロールする理想的食品になるのです。それも糸のなってしまうえば簡単には消化出来ませんが、ゼリー状で実に消化し易い状態では

す。このような理想の栄養食品、猿と云わず、みな知っています。て共存しているのです。

ベトナムでは3〜4年前までエリ蚕（野蚕の一種）の繭か糸を採った後の蛹が市場で売られていましたが、昨年位から急に糸を吐く直前の虫が大人気となり、繭の値段より高価に取引される事が有り、農家にとって手間が省け、よい収入になるので、繭が手に入りにくくなって来ました。

科学が目覚ましい発展を遂げる今日でも絹を作る虫ほど短時間で大量に低コストで理想的な高タンパクを作る事は出来ません。これからは木を伐採して牧場を作り、家畜から蛋白質を摂取するより、緑を復活させ地球環境を守りながら安価な高品質の蛋白づくりをする方が、持続可能な省エネ社会の実現に役立つと思います。

近いうちに、肥満防止、血糖値減、二日酔い止め、ほけ防止を兼ねたベトボトルが自動販売機で買える時代が来るでしょう。宇宙食にも利用され、猿に学んだ事が未来の人の健康と地球の環境を守る大きな力になると思います。

物理学者と詩歌の世界 (31)

一石

李政道 (Tsung-Dao Lee)

李政道 (Tsung-Dao Lee, 1925-) は、中国系アメリカ人の理論物理学者。上海で生まれる。父は化学分野の企業家。1943年に浙江大学に進学するも戦争により中断され、翌1944年に西南聯合大学へ転入。第二次世界大戦後の1946年にアメリカのシカゴ大学へ留学。エンリコ・フェルミ (参考図書1) のもとで学び博士号を取った。1957年、同門の楊振寧 (C·N·Yang, 参考図書2) とノーベル物理学賞を共同受賞。当時は、李は中華民国台湾 (Republic of China) の国籍を保持していた。彼はカリフォルニア大学やプリンストン高等研究所にも籍を置き、1953年にはコロンビア大学の助教授に就任。1956年には29歳で教授となった (参考図書3, 4)。

1956年、李は楊振寧とともに素粒子間の弱い相互作用においてはパリティ (対称性) が保存されない可能性あることを指摘した論文を発表した。これはコロンビア大学の同じ中国系女性物理学者呉健雄 (C·S·Wu) のグループによって直ちに実証され、物理学の世界に一大センセーションを引き起こした。2人は翌1957年度のノーベル物理学賞を共同受賞。受賞理由は、「素粒子物理学における重要な発見に導いた、いわゆるパリティについての洞察的な研究」。

このことについては三河アララギの前号で楊振寧 (C·N·Yang) についてのエッセイで紹介した (参考図書2)。このとき李は弱冠30歳であった (注1)。彼らは中国系の人物としては初のノーベル賞受賞者でもある。同年、アルバート・アインシュタイン賞も受賞。

パリティ非保存に関する業績以外に、Leeモデル (注2)、赤外発散におけるKLN (木下-Lee-Nauenberg) 定理 (注3) や相対論的重イオン物理 (注4)、非トポロジカルソリトン、ソリトン星、など素粒子論研究で優れた業績をあげた (注5)。彼の業績は素粒子論だけでなく統計力学、天体物理、流体物理、多体系物理、格子QCDなど広い分野にわたる。

彼はのちに中国へ行き、大学生を対象にした奨学金を設立するなど中国の科学教育分野でも活躍している。1985年、北京大学より、名誉博士号を授与されている。1997年にブルックヘブン国立研究所内に設置された理研BNL研究センターの初代センター長に就任 (兼任)。

李の言葉とエピソードを紹介する。

○対称なものはより安定であるにもかかわらず、なぜか自然は対称性を壊したがる。

○「一人の人間の成功にはさまざまな要因がある。その中で『チャンス』は最も重要なものかもしれないが、本質的に言って、最もコントロールしづらいものかもしれない」。

『李政道文選』（科学と人文）

○「イノベーションの科学人材を育成するには、良い指導教官と親密な子弟共同研究のプロセスが絶対に必要であり、これは省くことのできないもの、ネットワークやプログラムでは代替のできないものである。人は人であり、やはり学生―教師という関係が必要であり、1―2年以上の比較の長期にわたる精神的育成が必要である。このようにして育成した人材は、一生、独立した思考を行うことができる。」（李政道、『物理学の挑戦』）

○『李政道伝』（李承著、国際文化出版公司）には李と楊振寧との学術における恩讐についての記述もある。2人のノーベル物理学賞受賞者が、ある時期激しく衝突し、袂を分かつたという。何があつたのだろうか。

○1974年、筆者はCERNに短期滞在中、後にR・Hagedornらと共著で発表することになる論文の初期バージョンについて李博士の意見を伺ったことがある。博士の頭脳の明晰さと回転の速さに舌を巻いたものである。

注1…ノーベル物理学賞の最も若い受賞者はW・L・Bragg。父W・H・Braggと共に1915年に25歳で受賞。W・Heisenbergは1932年に30歳で受賞（参考図書5）。李は戦後では最年少の受賞者である。

注2…Leeモデル。場の量子論における可解モデル（1953）。

注3…李はM・Naumenbergと共同で、質量ゼロの

粒子と関連した発散の問題を解析し、KLN定理と言われる一般的な方法を提唱した（1964）。この定理は、現代の「標準理論」の量子色力学においても重要な役割を果たしている。

注4…1974―75年に李は「高密度物質における新形式」と題する数編の論文を発表。これらは、相対論的重イオン物理と言われる高エネルギー物理分野の開拓につながった。

注5…1975年から李は共同研究者らと共に非トポロジカルソリトンと言われる分野を開拓。それは後に（80年代、90年代）、ソリトン星やブラックホールの研究へとつながっていく。

参考図書

- 1) 三河アララギ、エンリコ・フェルミ、P 36、第58巻、第5号（2011）
- 2) 三河アララギ、楊振寧、P 40、第59巻、第7号（2012）
- 3) フリー百科事典ウィキペディア、『李政道』
- 4) Wikipedia, the free encyclopedia, T・D・Lee
- 5) 三河アララギ、ヴェルナー・ハイゼンベルク、P 36、第57巻、第11号（2010）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

四、伊藤左千夫 2

作品が「馬酔木」に載ると茂吉は左千夫を訪問し入門を果たした。明治三十九年三月のことである。そしてこの年のうちに長塚節、石原純、平福百穂らを知り、さらには翌年から始まる森鷗外宅での観潮楼歌会に出席したり、「馬酔木」を母胎に発行された「阿羅々木」に「短歌における四三調の結句」という大論文を発表したりして本格的に短歌に打ち込んだ。

左千夫は、新聞「日本」に「勾玉日記」という歌日記を連載していて、明治四十年四月十五日には、

海棠を写す

斎藤茂吉

菅の根の長き春日を書も読まず絵をかき居れば眠けく
もなし

面白く思ひ写せど青錆の色むつかしく絵になりかねつ

和へ歌

天然に色は似ずとも君が絵は君が色にて似なくともよ

し

世の人の巧み何せむ君が絵に春の光のただよふ見れば

と書いている。これを読むと、初期のころ、左千夫が茂吉の歌の才能に期待してどこか他の歌人とはちがう輝きを持っていることに注目していたことが想像される。右の「和へ歌」の中の「絵」はまさに短歌に置き換えて読むべきであろう。のちに茂吉ら若手は左千夫の選歌の基準をめぐって対立するようになり、ついには和解しないまま永訣することになるのである。

左千夫と茂吉の対立は、たとえば、「当時先生は岡千里君の歌を非常に褒めてゐた。そして『千里は偉い』と言つてゐた。僕のところへ選歌の原稿と一しよに千里君の歌稿を送つたときも、『一首も削るべからず』といふことわりが付いてゐたこともある。或る時、『千里君の歌がそんなにどこが久保田や古泉の歌と違ひますか』といふと、『苦勞を知らない、書生なんかは何が分かるものか』といったことがある。僕は其時顔を赤くして『そんなら一つアララギで論戦しませう』と云つて、編集所便か何かで先生に戦を挑んでゐる筈である。』（『思出す事ども』）から想像できる。

『赤光』所収の、「ひた走るわが道暗ししんしんと恠へかねたるわが道くらし」は、大正二年七月、長野県上諏訪で左千

夫逝去の知らせを受けたときの歌を収める「悲報来」の一首である。「わが道暗し」には、選歌、編集をめぐって数年前から左千夫を非難し、「師の細論を俟つて猛然として一矢を酬ゆる覚悟に御座候」(「アララギ」明治四十五年四月号「編集所便」とまで書き、ついには左千夫を選歌から退かせるに至ったまま和解することなく死別することになったことを無念に思う気持ちがかもっている。

五 平福百穂

平福百穂は茂吉の「アララギ」の歌友で、アララギの発行費や茂吉の留学費などを援助するほど親交が深かった。百穂も、赤彦や麓のところでとりあげた「斎藤茂吉送別歌会」の歌を詠んでいる。

此の日頃降りやまぬ雨をわびにつつ木の葉落ちたまる
を門に見て来し

『寒竹』

大正十年十月に日限地蔵で行われたこの送別会が雨に降られたらしいことがわかる。茂吉はこの送別会では、「わが心かたじけなさに充ちにけり雨さむきけふをあへる友はや」

と詠んで集まった人への感謝をあらわしているが、やはり「雨さむき」日であったことがわかる。

ヨーロッパでの三年間の留学を終えた茂吉は、大正十四年一月五日、神戸港に到着するが、その翌日は出迎えた憲吉や川田順らと大阪で夕食を共にしている。一月七日、大阪を発った茂吉を百穂は国府津で出迎え共に東京に向かった。

腰おろし吾がひたごころ親しかも君すこやかに帰り来
れり

『寒竹』

この道にひたすらにして年月をへにけむ君が服のほころび

百穂は、留学中に日本で起きた茂吉にとって悲しい出来事には一切触れずに、「すこやかに帰り来」たことを喜び、茂吉のほころびのある服を見て寸暇を惜しんで勉強に努めたであろうことを思っているのである。茂吉はこの日、「きもむかふ友とあひ見むと焼あとの寒き家より吾がいで来ぬ」と詠んでいる。

一月二十七日付の茂吉の百穂宛のはがきに、「先日以來鴻恩山よりも高く候」とある。これはアララギへの援助、留学費用への援助、そして帰国の際の出迎え等に対する謝恩をいうのであろう。

再びむすびの地へ

夏目勝弘

「奥の細道むすびの地記念館」が開館されたのを機に、再び水門川の辺りに立つ。

台風の名残しか、水門川の水量が少し多目のようであり流れも青味をおびている。

川沿いの歩道は桜・クス・トウカエデ等の並木の青葉であり梅雨の晴れ間よりの日射を遮ってくれる。少し汗ばんだ首筋を風がヒンヤリと吹きすぎる。

インターブロックの歩道は、桜などの木の根などにより、大きく波うち歩みづらい、時に躓きなどし船町の芭蕉像の前に着く。

むすびの地記念館は、道路の反対側に建っていた。

入館料三百円を払う、パンフレットと3D用のメガネを渡され、AVシアターに入り汗をおさめている間に、奥の細道の紹介が始まる。

3Dで見るのは初めてのため、数秒間なんとなく、ふわふわし画面が見られない、二三度瞬きをし落ちつく。

平泉を過ぎ日本海側に向う大山で日が暮れ封人(国境を守る役人)の家に逗留する。

(蚤虱馬が尿する枕もと)の所で、馬の面が突然スクリーンから飛び出す、前の席の婦人の悲鳴、体を大きく右に避けた。五ヶ月余をかけた二千五百キロの奥野細道も、十分そこでここで一巡りしてしまった。

そして三室ある展示室を回り、交流館の休み処でしばし休み。帰りはまだ見ていない大垣城を見るため城跡公園のなかを通る。歴女のグループが城の説明を受けていた。

大垣城は明治の洪水で崩れ、石垣は積み直されている。昔のままの石積は、戌亥櫓の角の一部分の算木積の数段のみである。

江戸時代の石積工の技術の高さがうかがえる。

會良旅日記を見ると、天気の話は毎日細かに書いてあり、歩くしかない旅においては一番気になるのが天気であろう。

宿の大方は門人等の世話によるところが大であったと思う。會良旅日記に、堂者坊(山小屋)に一宿。三人、壹歩月山。一夜宿。

コヤ賃廿文。とあり。

芭蕉は西行を、そして奥の細道を残す。子規は芭蕉の跡を八郎潟まで三十日かけ、汽車馬車、人力車等を利用して「はて知らずの記」を書いた。

自分は「はて知らずの記」の跡を七日間を青春キップで回った。もう十年余が過ぎた。

芭蕉の言葉より

○定型のなかに、宇宙を封じ込めること

○有限なる世界に生きそのなかに、無限なるものを発見する。

○限りある生命のなかに、悠久の生命を発見すること

○美とは後天的に感ずるものでなく、先天的に知っていることである。

○美を司る神靈精霊たちの呼吸を感じることに

○真の写生とは

さまざまな人生を織り込んでゆくことが宇宙を一枚の写真に写す如き形となつてゆく、そして思いを織り込んだ立体的なものでなくてはならない。

以上は辿り着ける境地ではないが、近づけるべく努力はしなくてはゆく。

「氷魚」のことから (139) 岡本八千代

今年も蒲郡俊成短歌会が催された。(四月二十九日) その時、愛知県史(近世・近代・黨業)の資料編発刊の案内があった。私は近代と近世の二冊を所望した。

その二冊がやっと届いた。一冊でさえ、ずっしりと重たい分厚い本であった。

さつそく、「近代」(12)の文化資料編を開いてみた。第一章・文学・第八節「短歌」(102) 353頁に、アララギ歌人「三河アララギ」創設者・御津磯夫氏の名前と作品の一部が載っていた。

それは、明治以降の流派や名古屋で刊行された短歌雑誌ごとにその作品を抄出した選ばれた歌人としてであった。そして、短歌十首、

「102御津磯夫『茜海荘』にて

一九三四年(昭和九) 五月一日」

と載せられていた。

ここに、その三首のみ抜粋してみよう。

○まかげしてきらめく波にむかひあつさびしきとりは一

羽鷲のとり

○あめつちのなごめるおもひ子をつれてなぎさをゆくに

赤き日はおつ

○冬にして松のなかなる部屋にをり磯風なぎて暮るるにはやし

また、歌十首のおわりに、(南海荘とは御油、赤根海岸なる我が小さき別荘なり)(東京慈恵会医科大学文芸部『醗酵』第一七号、今泉忠芳氏所蔵)とあった。

御津先生の若い時の作品であるが、すでに子規直系の岡麓氏にも師事しておられたと聞くから、相当に深くアララギの勉強をしておられたことを感じる。――。

さて、今から子規の「当世姫鏡」の続き。

十三。(翌年の春)

○お清は歎きの中にも光陰は過ぎ、その年も大磯に暮れて、翌年の春となった。

○才吉からは音沙汰も遠くなり、その言葉さえも儀式的になってしまった。

○お清は心塞ぐ日が多くなったので、女中頭のお瀧にさそわれるまま、あの糸井何某とかいうお客の座敷にゆく。

十四。(その年の冬の終りか早春)

○お清は中谷という人との出合があった。中谷は、千畳敷

という処へ景色を見に散歩に行くことにした。お清に「自分(中谷)の身の回りのものを片付けてくれ」と頼んで出かけて行つた。

○お清は片付けているうちに中谷の絵一枚を反故(ほうぐ)の中より引き出してみたら、束髪に結んだ美しい令嬢の肖像画があった。筆者は中谷であるがこの令嬢は誰なのか?

○その絵を裏返してみると、一枚の写真に二人の男女が。一人はこの絵の令嬢。一人の男は何と、才吉であった。

お清は涙ながらに令嬢に憎し妬(ねた)しの心高ぶる。(続)

ことのはスケッチ(404) 今泉 由利

『根岸病院の秋』

母校の小学校は、「この小さな御津から世界に広がってゆきなさい」と主旨する父の作詞した校歌でした。

忠実に、地球上の一番遠い国へ行ってみました。そして長い間、アルゼンチンに住んでいて、ある日気付いたのです。父と母から、こんなに遠く……一人で死でゆくのはいやだ。父母のところへ帰ろう。

目指して帰った父母の家は、父母は亡くなり、長男でなくては居てはいけない、ということになっていて駄目。自分一人、石のお墓の下に居ることは絶対にいや。

それで、自分のお墓をネット上につくることを考えついた。何もかも持ち込んでホームページ、私のお墓を現在制作途中ですが、ここに、根岸病院、石田秀一様よりメッセージが届きました。

『根岸病院は創立133年を迎えるにあたり、先人達の資料や情報を集めております。その中で、今泉忠男先生の描かれた「根岸病院の秋」という油彩画（1925年）の所在を探しております。情報をお持ちでしたらお教え頂きたいと思ひ連絡をいたしました』

父の絵のこと！父との日々に戻れたような！そして、メールは往復しました。

『根岸病院の秋』が現存とのこと、非常に嬉しく思います。当院の役員（お父様が描かれた頃の院長松村清吾の孫）にも報告しましたところ、とても喜んでおりました。役員自ら赴き、拝見させていただいて、写真を撮らせていただけないだ

ろうか、と申しております』

医学生だった父が研修先の根岸病院の油絵を描いたことは、父から聞いていました。

『お父様の三河アララギ短歌誌を続けておられることも拝見し、驚いております。続けることの大切さ、改めて感じました。斉藤茂吉先生（斉藤病院）も現在の根岸病院の近く、お孫さんの代になって続いているので、こうしてメールさせてい付き合いをさせて頂いているので、こうしてメールさせていただいていると何とも不思議な感覚になってしまします。』

父が、三河の御津と所在地を考証した万葉集の歌です。

小学校の学芸会の広い講堂で、担任の先生がオルガンを弾かれ、その横で私が、歌会始め、みたいに謡いました。そんなことがあったなあ。

その「引馬野」を実証されるということで斉藤茂吉先生が、父母の家に来られました。

雨の降る日ではありましたが、ここが万葉の引馬野であることを実証され、母の手料理でお待ち成しさせていただきましたこと。折にふれ、子守歌と聞きながら育ちました。

今泉医院は現在開院されましたが、父の時のままになっています。斉藤茂吉先生、土屋文明先生、アララギの歌人の訪ねて下さった家です。

診療室の壁に、父自身が掛けたそのままになっていた埃まみれの「根岸病院の秋」の油彩画の前に、根岸病院の松村英裕様と共に佇みました。

父が90年前に放った光りは、今改めて私に届き、沢山のことを思い起すはずになりました。この光を抱き、父と母と三河アララギを守ってゆきます。

和菓子街道 (70)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

瀬田の唐橋を渡ると、琵琶湖に映る姿の美しさが称えられた膳所城の御城下に入る。近江八景の「粟津の晴嵐」にも近い当地には、平安末期の武将・今井兼平の最期が語り継がれている。

朝日将軍と呼ばれた源氏の木曾義仲の乳兄弟で、義仲に忠誠を尽くした兼平。平家が都を捨てた後に都入りした義仲は間もなく失脚し、同じ源氏の源頼朝の命を受けた義経らの軍と瀬田で戦った。義仲の討死を聞いた兼平は、「死ぬ時は一緒」と、粟津の松原で義仲の後を追って自刃して果てた。

江戸時代、「兼平餅」なるものを出す茶屋があり、「兼平の武勇や忠義にあやかりたい」と評判に。松尾芭蕉や『忠臣蔵』の大石内蔵助、勝海舟も賞味したという。



兼平餅は一時途絶えたが、旧道沿いの亀屋廣房が江戸時代とほぼ同じものを再現。兼平餅は昔も今も膳所の歴史と兼平の武勇伝の語り部だ。

蓬と黒砂糖入りの餅で粒餡を包みきな粉をまぶした兼平餅。

◆亀屋廣房

住所：滋賀県大津市本丸町3-7

電話：077-522-3927

(フリーダイヤル 0120-02-3927)

お知らせ

▽九月号原稿は、八月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△伊藤八重子様
榊原恵美子様

長く長く三河アララギをお導き下さいました。お教えいただきました優しいさのなかの清明を心に抱き、三河アララギを続けてまいります。ありがとうございました。

今泉由利

△六月は三河アララギ会にとって悲しい月というイメージが定着しつつあるように思われます。御津磯夫先生、大須賀スエ先生、今泉桂子さん、大切な方々を失った月です。今また悲しいお知らせをしなくてはなりません。長い長い間三河アララギの会員であられた、伊藤八重子さんが六月二十日に亡くなられました。会の運営にも御尽力下さいました。最後まで歌人であられた方だったと思います。二十二日の葬儀で喪主を務められた御子息の御挨拶の中で、三河アララギ会に対して特別の感謝の言葉を頂きました。七月号の「私の一首」を読む限りでは信じられない出来事でした。最後の力を振り絞って書いて下さった二文です。心から御冥福をお祈り致します。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分三万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができます。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年七月二十五日印刷 第五十九巻 第八号
平成二十四年八月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人 発行所

今泉 由利
三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒四四一〇〇二二
豊川市 御津町 御馬 西 三 七
TEL (〇五三三) 七五二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇一六 五六三三九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumityuri.jp/>
印刷所 株式会社 桜創美